



## 山頂の神々の館

吉武 純夫（西洋古典学）

ミューズ女神たちの口から、  
疲れを知らぬ甘い声が流れいで、  
広がるその百合のような歌声に、  
雷鳴とどろかす父神ゼウスの館も笑う。  
女神たちの歌声は、  
雪残るオリンポスの頂と神々の館に響きわたる。

（ヘシオドス『神統記』39-43行）

夏休みに登山をするたびに、ひたすら登りながら思うのは、ギリシア神話でオリンポス山の頂付近にあるとされるゼウス神の館のことです。その床は青銅でできているといひます。

歌声が飴するような壮麗な館で、そこにまつわるさまざまな話も知られています。ところが、ギリシア北部に実際にあるオリンポス山は標高 2918m で、富士山より少し低いくらいですが険しい山です。その頂にどのようにしてそんな豪華な館があったというのでしょうか。だいいち、それほどの高所に館を建てられるほどの平地があるのでしょうか。多くの人々が登山する現在のオリンポス山にはそんな館がないことは明らかですが、私が思うのは古代の人たちがこれをどう考えたかです。

山頂まで行くのは今よりはるかに難しかったです。今のような登山靴はなかったし、山道がなければ自分で藪を切り進まなくてはなりません。誰も登った人がいなければ、ただそういうものかと思っていればよかったです。でも、行って見てこよう（あるいは無いのを確かめてこよう）という人がいつか現れたに違いありません。そしてある日ついに「何も無かったぞ」という報がもたらされた—

面白いのは、その時に人々がどう反応したかを考えてみることです。あれは嘘だったのだと思う人は少なからずいたでしょう。ある人々は、本当のオリンポス山はじつは別のところにあるのだと考え直したかもしれません。しかしまた、そうまでせずとも、神の館が人間の目には見えない仕方でやはりそこに建っているのだと考えることもできたでしょう。それならば、かのお話しが台無しになることは少しもありません。

そしてそのことは、じつは現代の私たちにとっても全く同じなのです。このことに気付くとき、私たちもなんだかほっとするのではないのでしょうか。



この夏登った利尻山の山頂

## 考古学研究室の日常

研究室名：考古学研究室

皆さんは考古学に対してどのようなイメージを持っていますか。エジプトのピラミッドや縄文土器、発掘やインディ=ジョーンズなど色々なイメージを持っているかと思ひます。今回は名古屋大学考古学研究室が行っている活動や考古学を専攻する学生の日常について紹介しひます。

研究室紹介—File20



エルサルバドル共和国での調査風景

文学部の学生は常に机に向かって難しい本を読んでいると思う方がいるかもしれませんが。考古学においても講義を聞いて、学術書から基礎知識を学ぶことは必要です。しかし考古学はフィールドワーク、屋外での活動を重視する学問です。毎年フィールドワークのひとつとして、夏休みに大学構内の窯跡の発掘調査を行っています。発掘調査は、地中に埋まっている遺物を研究対象とする考古学特有の研究方法です。2014年の調査では例年通り多数の須恵器や灰釉陶器とよばれる土器が出土し、現在も出土遺物の整理作業を行っています。このような活動を通して学生は発掘調査に必要な技術の習得を目指します。また、実習旅行で県外の遺跡を見学したり、エルサルバドル共和国での遺跡発掘調査に参加したりと、学生には国内外で、様々な形で考古学を学ぶ機会が与えられます。

現在、名古屋大学考古学研究室には教員2名、院生5名、学部生13名が所属しています。研究室単位での活動が多いので、学生同士、また教員との距離も近く感じられます。同級生はもちろん、上下の繋がりも強く、休日にはみんなで博物館見学ということもよくあります。昼休みになると埴輪について語り出す人やスコップを持たせると目が輝く人、古墳を見つけると必ず登る人など、個性的なメンバーで構成される研究室の扉を一度叩いてみてください。  
[深谷 岬 (学部4年)]

### 研究室紹介—File21

## 人間のこころを捉える

研究室名：心理学研究室

心理学ということばからどんなイメージを思い浮かべるでしょうか。カウンセラー、心理テスト、脳科学…テレビを見てると心理学を勉強すれば他人の心が読めるようになるのではないかと思いますほどです。

心理学では、ヒトのさまざまなふるまいの解明を目指しています。たとえば、なぜ空は青く見えるのか、なぜ緊張すると心臓がドキドキするのか、空気を讀むってなにを讀んでいるのだろうか…毎日経験することですが、どのような仕組みなのかと聞かれると、なんとなくわかるような、わからないような。一見当たり前に思える心の働きを真剣に考える学問、それが私たちの学んでいる心理学です。

私たち心理学講座では、この心の働きの問題を科学的に解明しようと試みています。なぜ「科学的」である必要があるのか。それは心が曖昧でよくわからないものだからです。そのために私たちは実験、観察、調査などの方法を用いて「事実」を集めます。「私はそう思うから」ということではなく、あくまでも客観的な事実によって真理を見極めるのです。当然、これらの方法を使いこなすためには鍛錬が必要です。統計学、生物学、工学まで…毎年学生からは文学部の皮をかぶった理系だとため息が聞こえてきますが、そこを乗り越えた先には情報に流されない客観的な視点と大きな発見が待っているはずです。その発見は、誰かの心を読むことよりもエキサイティングな経験になることでしょう。

毎年6月に行われる名大祭では、知覚の不思議やウソ発見器などを通して心理学を体験して頂ける企画を催しています。普段気にも留めない人間の奥深さの入り口に是非お越しください。

[山川 香織 (博士後期3年 (執筆時))]



### 最近の文学部

## 師走

12月に入りました。師走というのはそもそも教師ではなく、お坊さんが走り回るからという説が有力なようですが、教員にとっては秋の学会シーズンが過ぎ、後期の授業も半分を越え、すこし一段落というところでしょうか。一方で、卒業論文の提出を年明けに控えた4年生は、慌ただしい日々を送っているようです。(K記)